



Title	＜紹介＞飯倉洋一著『仮名読物史の十八世紀』
Author(s)	仲, 沙織
Citation	語文. 2026, 126, p. 85
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106107
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

紹介

飯倉洋一著『仮名読物史の十八世紀』

仲 沙 織

本書は、従来の文学史において「近世小説」と分類される仮名草子から合巻に至る散文ジャンルと、それらに含まれない漢字仮名交じりのテキスト（教訓書・雑書・軍書・通俗（翻訳）物・国字解・紀行文・随筆・名所図会など）とを包含する分類概念として「仮名読物」を提示し、新たな文学史の構築を試みたものである。特に現行ジャンルにはない領域としての「奇談」と、方法としての「寓言」という二つの視角から、「仮名読物」の諸様式が形成され始める十八世紀を中心に論じている。

第一部「江戸産仮名読物の誕生」では、十八世紀前半の官民一体となった庶民教化ブームを背景に、佚斎楞山による「寓言」を駆使した作品が「奇談」の端緒であると指摘する。また、教訓書ブームや談義本流行の素地を作った常盤潭北を、俳諧と教訓との橋渡し役として近世散文史上に位置付ける。さらに『作者評判千石籬』の談義本批評には、「奇談」が教訓臭さを離れ、教訓性を保ちつつ面白い慰み物へと展開する仮名読物の史の変遷が表れていると指摘する。

第二部「奇談という領域」では、十八世紀における書籍目録の分類項目のひとつである「奇談」を、近世前期から近世後期へ移行する過渡期の文学史を繋ぐ領域として仮設し、形式や内容の特

徴について分析している。「奇談」は浮世草子・談義本・初期読本など、現行の「近世小説」のジャンルだけではなく、それらに属さない作品も含まれる仮名書物群であるが、その内容は教訓・啓蒙を目的とし、語り手と聞き手の存在する「語りの場」を枠組みとする、面白い話の集成であると総括する。

第三部「〈学術寓言〉の時代」では、「寓言」の方法のうち、作者たちが古典論・和歌論を虚構の物語の中に組み込み、登場人物に語らせる構成様式を「学説寓言」と定義する。これらの「奇談」における利用方法と展開や、同好の知識人である作者と読者との関係性における役割について論じている。

第四部「仮名読物の諸相」では、「奇談」と「怪談」に共通する談話性に着目し、前期読本を軸とした「怪異語り」を論じる「怪異語り序説」をはじめ、読本・絵本読本・名所図会に関する論考を収録する。

近世の中期にあたる十八世紀は、人々の営為（学び・戯れ・繋がり）が出版文化に支えられ、大きく文化的発展を遂げた時代である。本書は、その状況を反映する「仮名読物」（特に板本）に焦点を当てることで、新しい十八世紀文化像の提起を試みており、近世研究者のみならず広く近世文化に関心を持つ読者に強い刺激を与える一冊である。

（へりかん社、二〇二四年一月、三六〇頁、七、七〇〇円＋税）

（なか・さおり 本学特任研究員）